

世界を舞台に
戦える開発力、
先進性の高さ。

▼大沢樹生氏との対談記事は※・※頁に掲載



▼人類地球生物・地球環境に貢献できる商品の開発。世界で勝てる、通用する商品の開発。国内大手がやらないものの開発——『G-Tech』はそうした高い目標を持って事業を推進している。同社が手掛けるバッテリーシステムは自給自足を可能にするオフグリッド型で、利用者にはコスト減と安定した電力、そして社会的にはカーボンニュートラルの実現に寄与する先進性の高さが魅力の、世界規模で注目される商品だ。

▼同社が世界規模に展開できるのはその開発力の高さもさることながら、平林 CEO が世界の事情に通じ、日本の社会・企業の課題の解決や克服を見据えている点も大きい。たとえばフランスでは、風力や太陽光のシェアを広げていくにあたって、「雇用がどうなるか」という点を取り沙汰されているという。太陽光発電などの再生可能エネルギーは人力を必要としないエネルギーで、もし再生可能エネルギーが火力発電に取って代わったとしたら、それまで発電所に勤めていた人の行き場がなくなり、雇用問題が発生すると予想されるからだ。CEO はそうした具体的な議論が日本ではほとんど進んでいないことが問題の一つとした上で、自分たち事業者も具体的に何ができるかを考え、社会に寄与したいと語る。

▼目先の利益にとらわれていては、いつしか衰退の道を辿っていく—— CEO がそのことを実感したのは、かつてパソコンを開発していた『東芝』勤務時代だったという。当時は最先端を走っていた事業だったが、やがてコモディティ化していくだろうと CEO は確信していた。その予測は的中し、今や一般の人から見ればどのメーカーの商品も似たり寄ったり、店頭では価格競争になっている。メーカーのブランドで選ぶ人もいるが、それも強いアピール力はもうなくなっている。「ここ 10 ～ 20 年で大きく変わったのは、ブランドがブランドでなくなったこと」と CEO。過去 100 年で築き上げてきたブランドも通用しない時代になっている。

▼しかし、裏を返せば、ブランドを持たない新興企業もチャンスをつかみ取れる時代とも言える。100%自家発電、自家消費を可能とする再生可能エネルギーは今後、家庭をはじめ工場やビル、様々なところへとどんどん活用が広がっていくだろう。人類と世界に貢献するという大きなテーマに向かっての開発だから、その商品が陳腐化することはない。確かな実力と思想を持つ会社を選ばれる時代になっている今、『G-Tech』は国内企業が末永く生き残っていくための大きなヒントを提示しているように思えるのだ。

CEO / 工学博士

平林 真一

株式会社 G-Tech

WWW.G-TECH.Tokyo

東京都千代田区丸の内 3-2-2 丸の内二重橋ビル 2 階

設立日：2014 年 1 月 15 日

資本金：10,000,000 円

事業内容：太陽光 EPC 及び O&M Off-Grid Battery の設計、開発、販売

校正用 COPY 転載厳禁

「大切なのはどのような生き様を示すか。
私にとってそれは、人類に貢献すること」

KEY WORD

生き様

— ikizama —

生きている間に、個人としてどういう生き様を示すか——

それが平林 CEO の人生における主題だ。

学業修了後に『東芝』に勤務した CEO はそこで着々とキャリアを築くと共に同社の「産業全体をどう育てていくか」「アジアの代表としてどうあるべきか」といったイズムを吸収し、その意識を自身の人生の指針にもしていった。今 CEO が『G-Tech』にて広く人類に貢献する事業を目標に取り組むのも、自身が信じ、このように歩みたいと願う「生き様」を明確に描いているが故だ。高大なる主題を胸に、CEO は世界を舞台に活躍を続けていく。

Pick up

THE PERSON

校正用 COPY 転載厳禁